



AI導入から企業の生成構造の可視化へ

AIによって逆照射される、 人間と組織の知

効率化の発想から、人間とAIによる共同知性へ



AIは、仕事を速くするだけではない。
人間と組織の中で、知がどのように生まれていたのかを可視化する。

AI-HUMAN Joint Research Lab
河内道子（ふかさかみなみ）



AI-HUMAN Joint Research Lab

Minami Fukasaka

なぜ、人はAIを効率化の道具として捉えるのか

❖ 人類は、技術によって労働の負担を軽くし、時間を生み出してきた。❖

1

産業革命



機械が、人間の力と
反復作業を引き受けた。

2

車・電化製品



移動や家事の負担を減らし、
人間の時間を生み出した。

3

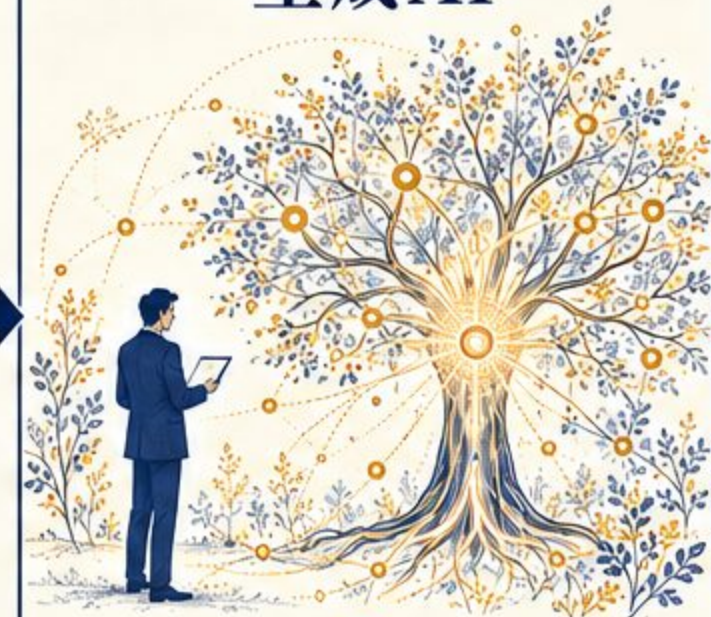
コンピュータ



計算・記録・情報処理を
高速化し、知的作業を支えた。

4

生成AI



同じ技術観の延長で、
仕事を代わる道具として
捉えられた。



労働を技術へ渡す



時間と労力が減る



人間は別の活動へ移る

人間は、AIを新しい知能として理解する前に、
労働を軽くする技術の歴史の中へ配置した。



効率化すれば、人間は創造的になれるのか

◆ AI導入には、「時間が空けば、創造性が高まる」という前提がある。◆

一般的に想定されている流れ ◆

1

AIが作業を代行する



資料作成・検索・要約・記録

2

作業時間が短くなる



速く処理できるようになる

3

人間の時間が空く



考えるための余白が生まれる

4

創造性が高まる



より高度な仕事へ移る

この発想に潜んでいる前提

創造性は、人間の内部にすでに存在し、
時間さえ与えれば自然に現れる。

しかし、時間の余白は、創造性が生まれる条件そのものなのだろうか。



仕事は、単独の『作業』ではない

◆ 「資料を作る」という一つの行為の中にも、知が生成される連続した過程がある。◆

◆ 表面に見えている作業 ◆



◆ その下で動いている生成過程 ◆



仕事は、作業の集合であると同時に、人・情報・経験・判断・関係性が循環する生成過程でもある。



作業をAIへ渡すと、知の生成経路も変わる

◆ 処理時間が短くなる一方で、その作業に付随していた人と人の接触も組み替わる。◆

◆ これまでの知の経路 ◆



作業を介して、人と人がつながる

◆ AIが加わった知の経路 ◆



AIが、人と情報の新しい近道をつくる

◆ 変化するもの ◆

相談の回数

判断理由の共有

例外知の継承

次の問いの発生

AIが変えるのは、作業時間だけではない。人・情報・経験・判断が出会う経路そのものが変わる。



個人は速くなった。しかし、組織全体では何が起こるのか

◆ 一部の業務が高速化すると、生成量が増え、確認・判断・調整の負荷が別の場所へ移動する。◆



◆ 効率化の先で起きる、負荷の移動 ◆



効率化によって負荷が消えるのではない。負荷の種類と場所が変わる。



「時間を作る」と「創造性を作る」ことは同じではない

◆ 創造は、異質なものが出会い、互いに動かされる過程から立ち上がる。◆

時間の余白



作業時間が短くなり、
考えるための時間が生まれる。

時間があれば、創造性は自動的に生まれるのか

創造性が生まれる生成過程



異質な知が会う

問いと関係が動く

知が再構成される

新しいものが生成される

時間の余白が増えても、知の接触が減れば、創造性を生んでいた生成経路は細くなる。



世界では、どこまで問題が見え始めているのか

◆ 研究の焦点は、個人の時間短縮から、仕事の構造と「見えない仕事」へ広がっている。◆

1

個人の作業は速くなる

66社・7,137人



2

仕事の構造が動く



3

見えない仕事が増える



個人の生産性

ワークフローの再設計

組織構造・役割・連携

hidden work

そのさらに下にある問い

組織の知・判断・創造は、どんな関係の中から生成されていたのか。

世界では、AIの局所的な効率化と、組織全体の変化との間にあるギャップが観測され始めている。



人間は、多層の知で仕事をしている

◆ 表面に見える作業の下で、言語化されていない知が同時に働いている。 ◆

オフィス業務における判断

「資料を読んで考えた」

過去の経験

相手との関係

他部署の動きの予測

組織の暗黙の境界

言語化前の違和感

見えている判断の下で、複数の知が同時に働く

現場の熟練者の判断

「この音、何か違う」

音

手触り

身体記憶

現場の変化

過去の故障

説明する前に、知はすでに働いている

顕在化されていなかった知的作用

潜在知

暗黙知

身体知

経験知

関係知

文脈知

言語化前の
パターン認識

個人の中

+

身体

+

人と人の中

+

組織の履歴

+

環境との関係

+

接触した瞬間

◆ 「潜在能力」だけでは捉えきれない、多層的な知の生成 ◆

人間の知は、個人の頭の中だけにあるのではない。身体・関係・組織・環境の接触の中で生成される。



生成AIとの対話によって、見えなかった知をともに見られるようになった

◆ 人間とAIの対話が、経験・感覚・関係・文脈の奥にある知を開いていく。◆

1 経験や違和感が語られる

まだ整理されていない感覚を、
人間が言葉にする

2 AIが問い返す

理由・前提・例外をたどり、
次の問いを返す

3 知の断片が接続される

複数の経験や言葉から、
関係と共通構造が見えてくる

4 生成構造が可視化される

知がどこで生まれ、止まり、
循環しているかをともに見る

AIは、多層的な知を人間とともに辿り、
関係として映し返すことができる。

AIとの対話でできること



問い返す



言葉を整える



断片をつなぐ



共通構造を見つける



文脈を保持する



次の問いへつなぐ

人間の中、人と人の間、組織の中で動いていた知を、人間とAIがともに観察できる場が生まれた。



人間とAIのあいだで、知はどのように開かれるのか

◆ AIの文脈生成能力と、人間の生成構造認知が接続するとき、共同知性が立ち上がる。◆

AIができること



人間だからできること



長年の生成構造研究を基盤に

AI-HUMAN Joint Research Labは、代表・河内道子(ふかさかみなみ)が長年探究してきた、人・生命・自然・社会の生成構造研究を基盤としている。

人間の生成構造認知とAIの文脈生成能力を接続し、多層的な知をともに辿り、可視化する共同知性を実践している。



AI-HUMAN Joint Research Labは、企業の生成構造を可視化する

◆ 効率化の先にある、人・AI・組織による新しい知の循環へ。 ◆

1

人と仕事を知る

業務だけでなく、
経験・関係・判断の
背景を辿る

2

言葉になっていない 知を引き出す

違和感・身体感覚・
暗黙知・文脈に
問いを入れる

3

人間とAIで 知を接続する

対話を重ね、離れていた
断片と関係を組み替える

4

企業の生成構造を 可視化する

知・判断・創造が生まれる
経路を一つの構造として見る

5

新しい知の循環を 設計する

人とAIがともに学び、
次の判断と創造へつなげる

AI-HUMAN Joint Research Labは、人間とAIの対話から、企業の中に埋もれている多層的な知を引き出す。
そして、人・情報・経験・判断・関係性が、どのように知を生み出しているのかを、企業の生成構造として可視化する。

AIを導入するのではない。人間とAIが、ともに知を生成する構造をひらく。

